スイス中世史研究の現状と背景

田中　俊之

ハプスブルク家の現当主カール・フォン・ハプスブルク（1961 年生）は、ペーター・ホイザー編著『アーレ川とボーデン湖の間のハプスブルク家』（2010 年刊）の序文に寄せて以下のように述べた。［(　) 内は筆者による補足。以下同様。］

「ハプスブルク家の系譜に連なる者たち（現在およそ 500 名を数える）はアールガウ地方（スイス北部：チューリヒとバーゼルの各領域に挟まれた一帯）のムーリに定期的に集まり、神々しい修道院において今は亡き親族をともに追悼する。こうした集会がハプスブルク家の特別な歴史を背景に（スイスの地で）行われることは別に驚くに当たらない。ずっと以前であればスイスに位置するその場所でそれが行われることは驚くべきことだっただろう。確かに古き盟約者団は周知のようにハプスブルク家とは決して打ち解けない関係にあったのだから。

中世におけるハプスブルク家と盟約者団の関係を特徴づけてきたプロパガンダ色の強い争いごとや流血をともなう対立関係を目の当たりにすれば、ベネディクト会修道院ムーリがおよそ 1000 年前にハプスブルク家の始祖によって建立され、初期ハプスブルク家の支配の中心地にあったことは今やほとんど忘れ去られているだろう。何世紀にも及ぶ貴族家系の歴史の原点はアールガウ地方にあるのだ。ハプスブルク家はいわば《アールガウ人》であり、この地方に数多くの足跡を残してきた。その足跡は敵対よりも共同によってより強く特徴づけられる過去を想起させるものである。

（中略）

（ここ数十年、汎ヨーロッパ主義の運動に活発に従事してきた）きわめて政治的な家系ハプスブルク家の当主として、ヨーロッパ的な活動と地域的な根っこの結び合わせは私にとって強い関心事である。アールガウ地方と今日のスイスの領域はたんに遠方のかつてのハプスブルク家の支配領域だったというだけではなく、われわれの ― ハプスブルク家の過去の一部分なのだ。こうした意味で、本書が戦いのどよめき、英雄伝説、ナショナリスティックな目隠し革に左右されずにハプスブルク家と盟約者団の歴史を多様な観点で捉え、故郷におけるハプスブルク家の活動の価値を認め、共同で結びついた過去の新しくきめ細かな像をスケッチしてくれるなら、私にとっては望外の喜びである。」

かつてスイス中世史はスイス盟約者団形成・拡大の歴史であり、中央山岳地域の農民たちの同盟に端を発するハプスブルク家打倒の歴史であった。有名なヴィルヘルム・テルをはじめとする英雄伝説や 16 世紀半ばに書かれたエギディウス・チューディ（スイスのカントン＝邦・州の 1 つグラールスの書記）による大部の歴史叙述が、ハプスブルク家による抑圧的支配への抵抗とハプスブルク家支配からの解放・独立という対ハプスブルク闘争史観を醸成し、ゲーテやシラーなどドイツ古典主義文学にも影響を与えたことは言うまでもない。日本でも瀬原義生氏は数多くの刊行史料に種々基づきながらもこうした史観を前面

に押し出してスイス史の 1 つの型を作り上げたし、森田安一氏は現代のスイス事情までも余さずフォローし、他のヨーロッパ諸国との比較のうえで「第 3 の道」を歩んだ盟約者団国家スイスをやはり対ハプスブルクの歴史として描き出し、型を定着させた。しかしおそらくスイス建国 700 年とされる 1991 年前後から、新たな視点を模索するスイスの研究者たちの著作が続々と現れ始め、ハプスブルク家当主が言う「プロパガンダ色の強い争いごと」や「流血をともなう対立関係」の持つ意味や事実関係の再検証がなされるようになってきたように思われる。そこでは 1291 年の永久同盟文書、1315 年のモルガルテンの戦いと更新同盟文書、1386 年のゼンパハの戦いをはじめ、さらに 1415 年の盟約者団によるアールガウ攻撃・占領からシュヴァーベン戦争（スイス人戦争）に至る 15 世紀の数多くの戦争が俎上に載せられ、ハプスブルク家と盟約者団の不幸な歴史について対ハプスブルク闘争史観から脱皮しようとする議論が展開されたであろう。それらはすべて、盟約者団がハプスブルク軍をことごとく破ってその名をとどろかせたプロセスを金科玉条としてスイス人の歴史観を育んできたことへの強い異議申し立てであると同時に、スイスにおいて長らく不遇であったハプスブルク家の《復権》をめざす試みに結果的にはなったであろう。またここ数年の間に、オーストリアをはじめスイス近隣諸国の研究者たちも参加して、対象の時空を広く取り、スイスに限らず全ヨーロッパ規模でのハプスブルク家の役割と意義を論じる研究もいくつか出てきている。上記の現ハプスブルク家当主は汎ヨーロッパ主義の推進者としても活動しているが、その目的意識と視野は、今後のハプスブルク史研究にも共有されうるものかもしれない。筆者が末席を汚しているアルプス史研究会にも何らかの影響を与えてくれることだろう。しかしこうして、ハプスブルク家の位置づけが大きく変わろうとしているなかで、これまでスイス人の歴史意識、あるいはスイス史への視点に浸みついた「戦いのどよめき」、「英雄伝説」、「ナショナリスティックな目隠し革」は今日までどれほど払拭されてきただろうか。

対ハプスブルク闘争史観の端緒となった出来事とは、言うまでもなく 1291 年の永久同盟文書、1315 年のモルガルテンの戦いと更新同盟文書である。永久同盟文書には敵対者として「ハプスブルク家」の文字はどこにもないにもかかわらず、“前後の文脈から合理的に考えて”それは対ハプスブルク防衛同盟だと断定されてきたし、ウーリ、シュヴィーツ、ウンターヴァルデンの農民たちが同盟を結んだことを記す 1315 年の更新同盟文書も、直前のハプスブルク家との戦いを根拠に、またも“前後の文脈から合理的に考えて”それは対ハプスブルク防衛同盟だと断定されてきた。この 2 つの同盟文書はその後ともに 13・14 世紀に盛んに結ばれたラント平和同盟の一環だとする説がドイツやスイスでは有力となり、日本では斎藤泰氏がそれを支持し、多数の論稿で旧来説への批判的検討を展開した。しかし斎藤氏による史料研究は（おそらく最終的に）ハプスブルク家との対立・抗争の図式から脱することができず、その矛先を鈍らせてしまったと言わざるをえない。

ところが 1291 年と 1315 年の問題に主眼を据えて持論を展開したロジェ・サブロニエ著『盟約者なき建国時代――1300 年頃のスイス中央地域における政治と社会――』（2008 年

刊）の内容は、スイス中世史の新しい動向としてあまりに衝撃的であった。そこには修道院と農民、ザンクト・ゴットハルト峠の南と北、1291 年の永久同盟文書、1315 年のモルガルテンの戦いと同盟文書、等々、盟約者団形成初期史にとって興味深いテーマが並んでいる。著者の主張・指摘を一部ピックアップするなら、ざっと以下のようになろう。

1) スイス中央山岳地域では 13 世紀後半以降、修道院による大農場経営の組織化（修道院隷属民への土地の貸与・小作化、家畜・乳製品・毛皮・羊毛などの商品化・輸出）が進行し、アルプス以南の北イタリア諸都市（ミラノ、コモ）やアルプス以北の諸都市（チューリヒ、ルツェルン）からの需要を生み、これが地域経済を活性化させ、結果としてスイス中央山岳地域と南北諸地域の間の経済交流が進み、市場が拡大、このことがゴットハルト・ルートを勢力下に置きたい政治勢力（ハプスブルク家とは限らない！）の関心を招いた。2) 1291 年 8 月 1 日の日付のある永久同盟文書（原文はラテン語）に記された同盟者は、1933 年刊の包括的史料集において訳されたドイツ語では「ウーリ谷のすべての人々、シュヴィーツ谷の全体、ウンターヴァルデンの下の谷の人々の共同体」となっており、3 つ目をウンターヴァルデンの下の谷、すなわち「ニトヴァルデン」だと特定する根拠としているが、ラテン語の原文でこの部分は「下の谷の山間部の人々の共同体」となっており、これを「ニトヴァルデン」と特定する根拠は薄く、むしろ「ウルゼレン」と見たほうが 1) の状況に合致する。3) 放射性炭素法（C14−年代確定法）によれば、永久同盟文書が作成された時期はスイス中央山岳地域に勢力を張っていたヴェルナー・ホムブルクの動静から考えると 1309 年と考えるのが妥当であり、「1291 年 8 月 1 日」の日付はのちに付け加えられたものである。4) 1315 年のモルガルテンの戦いのあとに交わされた同盟文書は永久同盟文書の更新版とされているが、ウーリ、シュヴィーツ、ウンターヴァルデン（ニトヴァルデンとオプヴァルデンが合体しウンターヴァルデンとなった）が同盟者だとしても、永久同盟文書とは 2)の理由により同盟者が異なっており、更新文書とは言えない。5) 1315 年のモルガルテンの戦いは盟約者団の核となる上記 3 農村地域（ウーリ、シュヴィーツ、ウンターヴァルデン）の農民がオーストリア公レオポルト 1 世率いるハプスブルク家の大軍を壊滅させた戦いとして歴史に名を刻んでいるが、16 世紀のチューディを皮切りに 19 世紀に至るまでファンタスティックに描写され続けたものであり、チューディが記す軍勢の数も誇張の可能性が高い。

ここでは省略するが、サブロニエの刺激的な見解は上記 5 点にとどまらない。本書は数多くの雑誌や新聞で取り上げられた。そのうちのいくつかを見る限り、サブロニエの諸見解に対する評価はおおむね好意的であったように見受けられるが、批判的見解もいくつか見られた。そのなかでも唯一、サブロニエを一刀両断のもとに切り捨てたとでも言えるのがクリストフ・フィスターによる批判（自身の HP で公開）である。その冒頭に記された指摘をいくつか挙げておこう。「本書は外見においても（中身の）展望においても（サブロニエに）批判的な考えを持つ歴史家を怒らせるものだ。」「カヴァー絵は 1800 年頃のもので、これでもって 1300 年頃の時代をどう説明するつもりか？」「この不愉快な本のスポン

サーや出資者のリストはスイスの無教養人名辞典に載せられよう。」「大部分のイラスト説明は古文書を再現したものであるが、古文書を歴史資料として凝視する者は自動的に学問的論議の外側に身を置くことになる。」「シュヴィーツ（連邦文書博物館）の古文書が C14−年代確定法で分析されたが、誰がこんな無意味で価値のない年代確定法を用いようと考えるだろうか。もしやまともな歴史家や考古学者のなかにそんな人がいるとでも？」「補遺に国王書簡の目録と要約が挙がっているが、どの王か？もしやイスラエルの王？」「大風呂敷を広げられた学問的に無茶苦茶な話を説明するには（本書からの）次の引用で十分だ：書かれた史料は自由に裁量できる。全体のプロポーションを維持しながら、比較的良い状態で。」つまりは、「本書は読みづらく、言語道断であり、価値がない。」と吐き捨てるのである。

フィスターの批判はここまでが全体の 5 分の 1 であり、その後も「毒舌」は延々と続くわけだが、もう十分だろう。要するにフィスターはサブロニエのこの本の全部が気に入らないのである。もちろんこれはただのいちゃもんではないかと思える批判もある。しかし例えば、上記のサブロニエの論点 2)について、盟約を結んだのがウーリ、シュヴィーツ、ウルゼレンだったかどうかは検証の余地があるだろう。また「1291 年 8 月 1 日」を否定することは 8 月 1 日を建国記念日と定めた 19 世紀末以来のスイス人の歴史認識を覆すことにもなろう。盟約者団の起源に関する批判については、フィスターは自著を 3 点挙げているので、まずはそれを読まなければならない。しかし史料に向き合う場合、それが刊行史料であったならば、未刊行の原史料が活字化され、注釈が付けられ、刊行史料として編纂された時点ですでに、編纂者や校訂者の何らかの意図がそこに入り込んでしまっていることにも注意しなければならない。サブロニエはそこにメスを入れたとも言える。また、サブロニエの本の随所に古文書の一部分が 1 行ないし数行分切り取られたように載せられ、そこに活字化されたものが付され、現代ドイツ語訳も付されている（フィスターの言う「イラスト説明」）のは確かであるが、1 枚の古文書全体を、1 つ 1 つの文字を相当に大きく見せながら本のページに掲載するわけには到底いくまいし、そうでないから読み手が学問的論議の外側に置かれたわけでもないだろう。なぜフィスターはこうまでサブロニエを攻撃したのか。ベルンの歴史家（フィスター）とチューリヒの歴史家（サブロニエ）の違いか。まさかそんな訳ではないだろう。おそらくは、サブロニエが既成の概念に囚われず自由な裁量で史料解釈にトライし、しかしそれによって導かれた結論が突飛なものにしか見えなかったがゆえにそれを受け入れ難かったからなのではないだろうか。そこにはスイス人が連綿と育んできた歴史意識、あるいは自己のアイデンティティの由来を否定、もしくはそれに疑義を呈されたことへの感情的な反発があったのかもしれない。しかしである。サブロニエの言う「自由な裁量」とは、勝手気ままな憶測だけで史料や出来事を都合よく解釈しようとするものではない。この点は強調してよいだろう。フィスターはおそらくきわめて冒険嫌いのオーソドックスなタイプの歴史家だと思われる。じつはフィスターの文章は 1 つ 1 つが言葉足らずで逆に読みにくい。含意するところを筆者は読み解けていないかも

しれない。フィスターへの直接の反論はサブロニエがすでに亡くなっている（2010 年没）ためもはや叶わない。サブロニエの刺激的な諸見解を可能な限り検証していくことが残された者の課題である。

スイス中世史における一連の議論はスイス人にとって自身のアイデンティティにかかわる重い問題であり、対ハプスブルク闘争史観やそれに基づくスイス人の歴史認識もまたアイデンティティ形成のプロセスに位置するものであっただろう。しかし根拠となるものが事実に基づかなければ不幸の歴史を増幅させるだけである。それは中世人にとっての不幸ではなく、21 世紀を生きる私たちにとっての不幸である。スイスではようやく、これまで事実と信じられてきた事柄すら疑ってかかることから始めようとしている。翻って私たちはどうであろうか。どんな分野であれ、私たちは歴史家として歴史上の事実をどのように認定し、史料をどのように読むのであろうか。“前後の文脈から合理的に考えて”、あるいは一部の“証言”に基づいて導いた解釈や事実認定ははたして正しいと言えるか。そこに固定観念や先入観は紛れ込んでいないか。史料を素直に読むとこうなる、と提示するものはどうか。合理的解釈の美名のもとに、じつは固定観念や先入観の塊ではないのか。研究の場に限らず日常生活でも起こりうるこうした側面に私たちは対処できているだろうか。自分とは相容れない相手や考え方を固定観念に基づいて不当に遠ざけてはいないだろうか。ハプスブルク家と盟約者団の関係を再検討する使命を負ったスイス中世史研究の現状とその背景は、現代人にさまざまなことを語りかけてくれている。

（金沢大学教授）